演題名　肺癌終末期における薬物療法の実施状況と関連アウトカムに関する文献レビュー
演者氏名　那須雅典
所属先　近畿大学医学部内科学教室 腫瘍内科部門

那須雅典[1)]、中山智裕[1)2)]、高濱隆幸[1)]、林秀敏[1)]
1）近畿大学医学部内科学教室 腫瘍内科部門
2）甲南医療センター　緩和ケア内科

【背景】
終末期近くに細胞障害性抗がん薬を受けることは、入院および集中治療室入室率の上昇、ホスピス利用の減少、生活の質の悪化、社会的コストの増大、ならびに患者および家族の経済的毒性の増加など、質の低い終末期ケアと関連していることが報告されている。死亡前 14〜30 日以内の全身抗がん薬治療（systemic anticancer therapy：SACT）は終末期ケアの質を評価する指標として用いられており、米国臨床腫瘍学会や欧州臨床腫瘍学会からも終末期における過剰な薬物治療を控えることが推奨されている。近年、肺癌では免疫チェックポイント阻害薬（immune checkpoint inhibitor：ICI）および分子標的薬が広く使用され、薬物療法の選択肢は大きく変化している。一方、2025 年に報告された肺癌領域における終末期 SACT に関するスコーピングレビューでは、細胞障害性抗がん薬を対象とした研究が大部分を占めており、ICI や分子標的薬を含めた終末期 SACT の実態を包括的に評価した報告は乏しい。

【目的】
肺癌患者における ICI および分子標的薬を含む終末期 SACT の実施状況と関連アウトカムを整理し、現在のエビデンスと課題を明らかにする。

【方法】
PubMed を用いて、2004〜2025 年に発表された肺癌患者の終末期 SACT に関する文献を検索した。本検討では死亡前 30 日以内に実施された SACT を終末期 SACT と定義した。

【結果・考察】
既報の通り終末期 SACT に関する報告は細胞障害性抗がん薬に関するものが大多数を占めた、ICI が 5 件、分子標的薬が 5 件であった（重複あり）。終末期 SACT の実施割合は、ICI で 17.9〜44.5%、分子標的薬で 17.9〜71.9%であった。経時的変化を評価した研究では、ICI 承認前後で終末期 SACT 実施割合が 37.4%から 40.3%へ増加し、治療薬の内訳では、細胞障害性抗がん薬の割合が減少する一方、ICI の割合が増加していた。終末期 SACT は、細胞障害性抗がん薬のみならず ICI や分子標的薬においても、救急受診、入院、集中治療室入室、院内死亡の増加や、緩和ケア専門施設への紹介の遅延や滞在期間の短縮と関連することが報告されていた。本邦からの報告は終末期 SACT 全体で 5 件にとどまり、いずれも 200 例以下の小規模な集団を対象とした研究であった。分子標的薬、ICI のいずれにおいても、薬剤クラスごとの詳細な解析は行われていなかった。以上より、本邦の肺癌診療における終末期 SACT に関するエビデンスは限定的であり、特に ICI および分子標的薬について、薬剤クラス別にその実態を評価した研究は十分ではないことが明らかとなった。今後、本邦の大規模データベースを用いて、薬剤クラス別の終末期 SACT の実施状況および関連因子の検討を予定している。